

狹山市の無形民俗文化財(2)

柏原の獅子舞・柏原の祇園囃子

信立寺おめいこころ・諏訪神社なすとりかえ

序

今回、市内無形民俗文化財記録保存について文化財保護審議会委員の皆様方の手によって、調査を進めていただき、ここに発刊の運びとなったことを先ずお喜び申しあげます。

民俗文化財は、人々が日常生活の中で生み出し、継承してきたものです。これらは、地域的に共有される特定の形を持ち、これが繰り返し再生されていくという特性を持っています。このため、今日に伝えられた民俗文化財の中には、それぞれの地域の伝統文化の基層的なものが残存している場合が多く、地域文化を理解する上で欠くことのできない文化財と言えます。

このように日常生活の中で生み出された民俗文化財は、今日における急激な社会情勢の変化に伴い生活環境も大幅に変化させてしまい、日常生活そのものを根本から変革してしまいました。こうした状況下でも伝承活動に努力されている地元の方々のご苦労は計り知れないものと思います。

狭山市教育委員会では、前回の狭山市の無形民俗文化財(1)、広瀬・浅間神社の火祭りに続き今回、柏原祇園囃子・柏原の獅子舞・信立寺のお命講・諏訪神社のなすとりかえ、について報告書を発行することとなりました。これが、市民の方々に、狭山

市の文化財を知る一つの資料として活用していただければ幸いに存じます。

発行までには、文化財調査員はもとより、何よりも伝承地の皆様方の理解と協力に負うところが大きなものでした。ここに、深く感謝の意を表します。

平成二年三月

埼玉県狭山市教育委員会教育長

武 居 富 雄

目次

柏原の獅子舞

一、起源・由来について	一
二、組織・練習について	四
三、ソロイ・本マチと獅子舞の役割について	五
四、獅子舞の構造について	六
五、結び	八
六、資料①（獅子舞興行につき願書）	九
資料②（祭礼御獅子連名帳・嘉永六年）	一一
資料③（祭礼獅子連名帳・明治二十四年）	一一
柏原の祇園囃子	一九
一、八坂神社と天王さま	二二
二、天王さまの実際	二三
三、祇園囃子について	二五
四、資料①（八坂神社渡行改正法式）	二六
資料②（祇園祭展費寄付連名簿）	二八
資料③（祇園祭典寄付金決算簿）	三四

信立寺のおめいこう

一、信立寺について	三五
二、おめいこうの組織と諸準備	三八
三、おめいこうと万灯行列	三九
四、おわりに	四〇
諏訪神社のなすとりかえ	四一
一、諏訪神社の	四三
二、なすとりかえの由来	四六
三、草相撲の奉納	四七
四、祭の組織と内容	四七
五、現在のなすとりかえ	四九

例 言

一、本書は、柏原祇園囃子・柏原の獅子舞・信立寺のお命講・諏訪神社のなすとりかえの行事をできるだけ忠実に記録することに努めたが、若干の考察を加えた部分もある。

二、記録作成は、狭山市教育委員会が主体となって実施し、地の多くの方々と、伝承活動を行っている皆様の協力を得てまとめられたものである。

三、記録は、狭山市文化財調査員の協力を得て聞き書き調査を実施し、さらに、関係文書類を調査して本書に収録した。

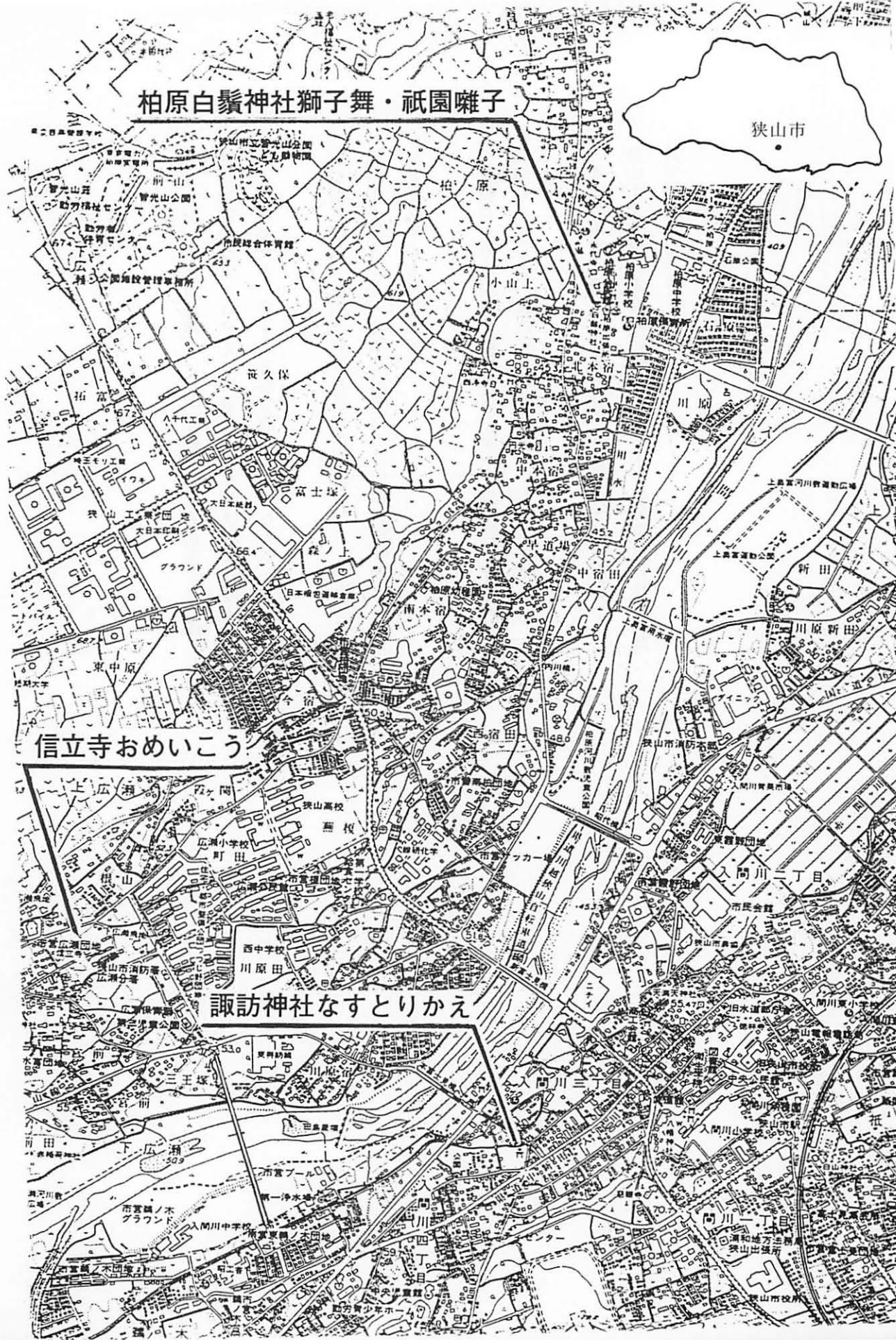
四、本書の執筆、編集は、狭山市文化財調査員（小峰孝男）、狭山市文化財保護審議会委員及び狭山市教育委員会社会教育課が担当した。

柏原白鬚神社獅子舞・祇園囃子

狭山市

信立寺おめいこう

諏訪神社なすとりかえ



柏原の獅子舞







柏原の獅子舞

柏原に伝承される獅子舞は、昭和三十六年頃迄は毎年十月十六・十七日に行われていた。その後中断していたが、昭和五十九年に復活しそれ以降十一月三日に行われるようになった。昭和六十一年には地区の有志により、柏原⁽¹⁾獅子舞保存会が結成され本格的な技術の習得・舞の復活及び後継者の育成に努めている。

かつて十月十六・十七日は柏原の鎮守である白鬚神社の秋の祭禮の日であり、十六日が獅子の村回り（ソロイ）で十七日がホンマチである。ホンマチには白鬚神社の境内で獅子が舞われたものである。

柏原の獅子舞は、入曽の獅子舞や入間川の鹿子舞などと同じく、入間・比企地方に分布する一曲形式の獅子舞に属するものと考えられ、その舞は勇壮且つ流麗であり、現在全ての曲が復活されてはいないが、近い将来村回りを含めた形でその再現が成されたならば、その文化的価値はさらに増すものとなるう。

一、起源・由来について

獅子舞の起源については明らかではない。しかし古い花笠の

裏側に「寛政七年」の記念銘のあるところから、江戸中期以前に起ったものであることは確かである。

一説によると柏原の獅子舞は入間川の鹿子舞から⁽²⁾授を受けたと言ひ、曲のたて方・笛の旋律などで互いに類似している点も多い、また柏原では入間川の「ウラ」を習ったものだとも言われている。

ちなみに川越市下小坂の獅子舞は、寛政年間に或る僧侶の夢枕に「武州入間川宿の獅子頭を招いて祈禱すれば夏ごとに流行する悪疫（赤痢・チフスなど）を退散できる」というお告げがあり、入間川^(鹿)の獅子に習ってはじめられたものであるという。また同じく川越市豊田本の獅子舞は柏原から⁽³⁾伝授を受けたといわれている。

言伝えによると柏原の獅子舞の始まりは、増田本家が獅子頭を柏原へ寄附したことによるという。それ以来毎年十月に、五穀豊穰・悪疫退散を祈願して執行されるようになったと伝えられる。

現在、白鬚神社には獅子舞に使用する獅子頭が新旧二揃い、⁽⁴⁾（一揃いは三つである）所蔵されている。またその外に竜頭と⁽⁵⁾称する古様の獅子頭が二つ遺されている。この頭は伊勢参りに出かけた村人が持ち帰ったものと伝えられ、これを冠ると雨が

降ると言い雨乞いの時に用いられた。あるいはこの竜頭は二揃いの獅子頭以前に獅子舞に用いられたものとも推測されよう。

増田純子家（柏原一六六二）所蔵の安政六年（一八五九）の「御用向留帳」（資料1）には、鎮守である白鬚明神の社地に於て毎年の恒例となった獅子舞を今年も興行したい旨を寺社役所へ願ひ出た文面が控えられている。これは白鬚明神の別當であり宮本院も兼帯していた光学院と組頭の栄次郎・惣右衛門と名主の増田熊太郎・長谷川六之丞が願ひ出たもので獅子舞が村の組織と深い係りをもっていたことが窺えよう。

二、組織・練習について

獅子舞は柏原地区内の人によって管理され、行われてきた。かつては地区の有志によって「獅子連中」が構成されていた。

柏原白鬚神社には、嘉永六年と明治二十四年の「祭禮獅子連名帳」（資料2・3）が保存されている。これによると古くから白（金）獅子・黒獅子・赤獅子・笛・（唄）は、それぞれ本役が定められ、師弟関係が厳格に定められていたことが分かる。これは昭和三十六年ごろ獅子舞の中断するまで続いていた。

獅子の舞は大変難かしく、折角覚えても他所へ出て行かれてしまうと次へ続かないということから、金獅子・黒獅子・赤獅子を習う者は長男に限られていた。ササラ（花笠）は子供のう

ちにやるものであるから特に長男に限らなかった。

弟子入りは小学校高等科を卒業したくらいの年齢（十四〜十五歳位）で弟子入りするのが通例であり、それくらいの年の長男のいる家に、すでに獅子を習っている先輩格の人が頼みに行つて承諾が得られれば、獅子の仲間に入ってもらい、各パートの親方の許へ弟子入りをした。

柏原の上宿と下宿ではそれぞれの獅子舞における役割が決まっている。

上宿	白（金）獅子	山神	笛二	ササラ二
下宿	黒獅子	赤獅子	笛二	ササラ二

であるから例えば上宿の者が黒獅子や赤獅子に弟子入りすることはないのである。

九月二十五日を過ぎると各親方の家で稽古が始まる。数人の親方の家で晩方から交替に宿をもらつて夜食に芋を煮たりした。獅子を習う者は、まだ装束をつけずに腰のあたりを太鼓の替わりに手で叩きながら獅子舞の型を覚えた。稽古は夜遅く迄続けられ、伝承者の一人は「毎晩、獅子舞の練習が終つて家に帰ると鶏が鳴いたものだ」と語っている。

十月十日の晩からは、白鬚神社の神官である宮本家の土間で本格的な練習が行われる。この時には、笛も獅子もすべて揃つ

て行われる、いわば「総合リハーサル」的な練習である。これは十月十四日迄続けられる。この時には踊手や関係者が五十名位集まって夜遅くまで行われる為、大きな鍋で「おじや」を煮てこれを夜食にした。夜遅い為に消化の良いものをという配慮から「おじや」を供する習わしであった。この五日間の練習は、獅子の頭を実際につけて行われ、獅子頭が緩まないように紐できつく顎のあたりに結えつける為、後でごはんが噛めないほど痛んでくることがあるという。ここでの練習も厳しく、練習が終ってからも年寄りからどこどこが気に入らないといわれて呼び出され、「カタ」について厳しく指導されることも間々あった。

十四日の晩の最後の稽古が終ると各親方は世話人に伺いを立てる。世話人とは親方と呼ばれる人のそのまた師匠格の人で、^{ハッ}白(金)獅子・黒獅子・赤獅子・笛から一名づつの計四名であり、いわば獅子の総責任者である。獅子に弟子入りした人は三年経つと十月十六日の「ソロイ」の村廻りに獅子を舞うが、世話人が練習の状況を見て最終的な判断をするのである。三年経っても上手になる人もそうでない人もいる。親方が「うちの方では今年は〇〇にソロイをかぶせたいと思いますがいかがでしょうか」と伺いをたてても、「もう一年無理だな」といわれて

しまうと一年待たねばならない。ソロイを勤めた人は、次の年には今度は十七日のホンマチに獅子舞をするが、これを「ヤマヘアガル」という。やはり親方は「うちの方では××をヤマへ上げたいと思いますが」と世話人に伺いをたててその承諾を得なければならぬ。

そのようにして十四日の晩に親方が世話人へ伺いを立てた時点で十六・十七日の獅子舞三役の顔振れが決定するのである。「ヤマヘアガル」のは二十歳前後で初めて勤めるのが普通であった。二十二・二十三歳を過ぎると次の弟子がいる関係上特別な事情がない限り獅子舞はしなかった。

稽古が終了し、獅子舞の顔振れが決まって十五日は終日獅子舞の準備である。獅子舞の道具は白鬚神社の土蔵に収納されている。それを運び出して、花笠などの飾り付けや獅子舞に羽根をさしたりする作業を行う。

三、ソロイ・本マチと獅子舞の役割について

十四日のソロイには獅子舞の行列が村廻りを行う。行列の順序は次の通りである。

金棒二―花笠四―笛四―唄四―山神―赤獅子―黒獅子―白(金)獅子

神社から出発した獅子舞の行列は「道トウリ」といわれる笛

にのせられて進んでゆく。最初に下宿の長谷川本家（元名主）⁽⁷⁾

の庭で舞い、それから上河内の辻・白山神社で同じく獅子舞をする。そして上宿へ廻り、辻（現在の金子屋の前の十字路）・

増田本家（元名主）の庭で行い、ソロイの村廻りは終了する。

前述した如く柏原の獅子舞は獅子頭を増田本家の先祖が奉納したことに始まるという言葉伝えがあり、一年毎に巡ってくる柿のなり年には増田本家の庭での獅子舞が終了した後に行列は神社まで戻り、白鬚神社（宮本家）で装束を脱いで翌日の本マチには神社から行列が出たが、柿のなり年でない年には、増田家の庭で舞終るとそこで装束を脱ぎ、獅子頭は一晩増田家に飾られて本マチには増田家から行列が発して神社へ向かったものである。

翌日の本マチには白鬚神社に仕つらえた木杵のある舞庭で、^{さき}「先ツクルイ」^{あと}「後ツクルイ」ともに行われる。これが獅子舞の一番の山場である。

次に獅子舞の所役とその年齢・装束などについて触れてみたい。

◎赤獅子・黒獅子・白（金）獅子 各一名

赤獅子は雌で黒獅子と白（金）獅子は雄である。

いずれも二十二〜二十三歳位の男子が舞うことになっている。

鱗模様の着物を着用し、黒足袋に草鞋をはき、腰に御幣をさす。腹部に太鼓を括りつけ撥を持つ。

◎花笠 四名

十二〜十三歳の男児が女装して行。左手にオササラ、右手にメササラを持ち摺り鳴らす。そのためササラを勤める子のことをササラッ子ともいう。頭上に花笠を載せるが、花笠には二十五本の飾花を付ける。昔は牡丹をかたどった花をつけたという。

ヤノカミ
◎山神（蠅追い） 一名

ササラと同じく十二〜十三歳の男児が担当する。羽織をつけ、股引を着用、草鞋をはき、御幣を持ち、天狗面をつける。

◎笛吹き 四名

三十五歳位の男子四名が本役である。羽織・袴姿に下駄あるいは草履をはく。丸絞りの手拭を首に巻く、笛は六穴の篠笛を用いる。

◎唱 四名

笛吹きと同じく三十五歳位の男子が勤めたというのが実際は成り年輩の師匠クラスの人が勤めたらしく、現在、唄のできる人はいないという。

◎法螺貝 一名

以上が獅子舞の所役の概略である。

四、獅子舞の構造

獅子舞は「先ツクルイ」と「後ツクルイ」とその合間に若干の中休みを挟んだいわば二部構成となっている。その両方に一つずつのテーマがある。それは先ツクルイでは「竿がかり」、後ツクルイは「花すい」である。

本マチでの舞の順序を記してみよう。

まず行列は「道通り」という笛で宮（宮本家）から外に出て参道を拝殿まで進む。この道通りには上・下の二種類の笛がある。

り座敷では上の笛、行列が外に出ると下の笛へ切り替わり参道の鳥居をくぐると上の笛で狛犬の前まで進む。そこで「宮参り」の笛となり、三頭の獅子は神前で撥を地につけてお参りの動作をし、社殿の回りを廻る。そして「イリハ」の笛で舞庭へ舞い込み、各々の定位置につき本格的に獅子舞が開始される。

イリハ以下の先ツクルイの流れは、

竿がかり—岡崎—ケンカ場—ヤリトリ—岡崎—ヒキハ となっている。

これは現在復活されている曲目で実際には竿がかりの後に、「あげ唄（寄せ）」という唄が入り、また、先ツクルイ・後ツクルイともにヒキハになる前には、三拍子（お女郎たち）・ヒ

ーホー・我がくに・トッピキビ・等の曲目があったが現在は唄を勤める人がいない為に復活されていない。唄は丁度謡のうたいのような発声で一文を長く伸ばして歌うものであった。三拍子は特に獅子の太鼓が難かしく三拍子の太鼓がうまく叩けるようになれば獅子は一人前といわれた。

獅子舞は人間がまだ言葉を知らない頃の有様を表現したものであるといわれ、すべての獅子の動作は先達の天狗様（山神）の采配によって行われる。

「竿がかり」では、山の神によって赤獅子と黒獅子・白（金）獅子の間に竹竿を入れて雌獅子と雄獅子を分ける。黒獅子と白（金）獅子はかわるがわる竿をくぐって赤獅子の許へ行き、自分の容姿を見せる場面である。

笛が替わって「ケンカ場」「ヤリトリ」となると、黒獅子と白（金）獅子が「ハナシ」という動作をして互いに談合をするのであるが、結局話し合いはつかない。黒獅子が先に赤獅子をみつけ仲良くしているところを、白（金）獅子が目撃し、飛び躍ねて怒りの感情を表現する。白（金）獅子は鈴をこねて黒獅子に巻きつけ赤獅子から引きはなし、喧嘩となる。喧嘩に勝った白（金）獅子は赤獅子の許へ行く。黒獅子は白（金）獅子の行った通りに鈴にからめて再び白（金）獅子を連れ出す。そし

て喧嘩となり今度は黒が勝つのである。すると笛がかわり、三頭と一緒に舞い、「ヒキハ」となって退場し、先ツクルイは終了する。

後ツクルイの曲の流れは、

ジササラー花スイー岡崎ーケンカ場ーヤリトリー岡崎ーヒキハである。

後ツクルイのテーマである「花すいは」、牡丹の花（花笠）をめながら三頭の獅子が舞っていたが、突然赤獅子が牡丹の花の中へ隠されてしまう、雄獅子二頭がそれを探して回るといった筋立である。昔はこの雌獅子がくしの場面で唄が入ったが、現在は省略されている。後ツクルイの花スイ以下の曲目は全く先ツクルイと同じである。

獅子舞の所用時間はおよそ、先ツクルイ一時間三十分・後ツクルイ一時間三十分である。

次に唄の歌詞を記してみたい。

◇岡崎 うれしやの雲に霞を吹きあげて

メジシ・オジシが肩並べた

そこでメジシ・オジシが肩並べた

◇寄せ 急ぎ来てこの庭を眺むれば

（あげ唄） 黄金小草が足にからまる。

◇ この宮は余り高さが高すぎて

落ちる木葉が軒に止まらん

我がくには雨が降るげて雲がたつ

おいとま申して帰りのかたち

◇花すい 思いもよらぬ朝霧がおりて

（岡崎か？） そこで雌獅子が隠されたえな

◇お女郎たち お女郎たちお女郎たちお女郎みたくば

（三拍子か？）板戸において板戸の上でも三拍子

◇花すい もろもろに花に心を奪われてそこで

雌獅子が隠された。

五、結び

以上柏原の獅子舞について概観してきた。獅子舞の三頭の獅子（白（金）獅子・黒獅子・赤獅子）の所作は三頭が一緒に舞うときでも、各々の獅子の型があってその型で舞わなければならないという。それが獅子舞の伝統であるそうである。前にも記した通り今後江戸期から続いたソロイの村廻りを復活することも大きな課題となろう。地区内を獅子が廻ることによって大勢の人に獅子舞を理解してもらい、その中からその伝統を受け継ぐ人という人が必ず出てくれるものと思う。

（小峰孝男）

オササラ 長さ 四十七、五

花 笠 直径 三十九、五

(5) 竜頭の寸法は次の通りである。(単位cm)

高さ 横はば 奥ゆき

目が黒い獅子頭 十五 十七 三十五

目が金の獅子頭 十八 二十 三十七

長さ 直径

つのはずれてしまったもの 三十六、五 二、二

(6) 雨乞いには竜頭をかぶり、御岳山から水をもらってきて

村廻りを行う。昭和二十五年に雨乞いを行った時には、

下宿を廻って獅子（竜頭）が東を向いたとたんに雨が降

ってきたという。

(7) 長谷川家には明治十四年の獅子舞の写真が保存されている。

る。その内の一葉が『明治大正昭和埼玉県写真集上巻』

(若狭蔵之助編 国書刊行会 昭和五十三年 頁四十六) に

掲載されている。

また宮本家には昭和九年の獅子舞の記念写真が保存され

ている。

(8) 獅子舞の歌詞については、小谷野金作氏の資料及び『埴

『玉の獅子舞』を参考とし、不明の点には？印を施した。

参考文献

『埼玉の獅子舞』（埼玉県教育委員会編）

昭和四十五年 頁四二～頁四三

『狭山市史・民俗編』（狭山市史編さん係）

昭和六十年 頁一三六～頁一三七

（資料1）獅子舞興行につき願書

△安政六年正月 御用向留帳より▽

（柏原 増田純子家所蔵）

御役所

（資料2）祭禮獅子連名帳

（柏原白鬚神社蔵）

（表紙）

嘉永六年

祭禮獅子連名帳

丑九月廿九日

（獅）
獅子連中

世話人

午年与

同

明治式
巳年与

午年与

同

直右衛門

鉄治郎

銀藏
勇藏

文吉
仲右衛門

仙太郎

宇右衛門

五郎兵衛

片

一當村鎮守白鬚大明神於社地来ル廿九日例年仕来之祭礼

木摺獅子興行仕度奉願上候

右願之通被 仰付被下置候ハ、難有仕合ニ奉存候已上

柏原村

安政六己未年九月 白鬚明神別當

宮本院兼帶 光學院

組頭 榮次郎

同 惣右衛門

名主 増田熊太郎

同 長谷川六之丞

寺社

師子方

黒師子方

安政二年
卯九月与本役
才 助
綱 吉
巳年与弟子
安政六未与本役
吉 五 郎
元治元年与弟子入
鉄 五 郎
慶応元年より本役
明 治 元 辰 与 弟 子 入
定 五 郎
明 治 十 年 与 弟 子 入
辰 五 郎

山 神

本役
安政五年与弟子
長 八
萬延元庚申年与本役
元治元子ヨリ弟子入
国 五 郎
明治九年与弟子入
豊 治 郎

倉 治 郎
宇右衛門
友 吉
寅年与本役
常 次 郎
兼 吉
慶 応 元 年
丈久二戌年
慶 応 元 年 以 上
明 治 元 辰 弟 子 入
明 治 十 一 与 弟 子 入

勇 治 郎
豊 治 郎
和 三 郎
午年与
辰 五 郎
亥年与
弁 二 郎
兼 吉
明 治 十 一 年 与 弟 子 入
徳 太 郎

花 笠

濱 吉
幸 蔵
字 吉

赤師子

鉄 治 郎

笛
吹

安政二卯年与

幸藏

助五郎弟子
午年与種吉弟子

鍋造

八五郎

惣七

長三郎

同 鍋造弟子

泰五郎

新吉

同 九左衛門弟子
元治元より 戌年より
師子江廻る 周吉弟子 ○

周吉

安政六末年与

新造

利助

鉄五郎

国五郎

利介

庄五郎

平六

佐五兵衛

歌え方

同人弟子

種吉

勇藏弟子

勇藏

平六弟子

初五郎

十兵衛

銀藏

仲右衛門弟子

仲右衛門
" " " "

十兵衛弟子

六右衛門

弥五郎

万右衛門

佐五右衛門

同人弟子

九左衛門

同人弟子

茂右衛門

弥五郎弟子

文吉

万右衛門弟子

勘太郎

平六弟子

増五郎

午与銀造弟子

彦七

吉右衛門弟子

久五郎

彦七

万右衛門弟子

太 平

卯年

常 次 郎

村役人

小 平 次

五右衛門

六右衛門

千 松

彦右衛門

村役人

惣右衛門

人足 式人

平 造

栄 治 郎

本 上

平 造

彦右衛門

午年 村役人

吉 五 郎

人 足

上

平 藏

直右衛門

下

平 造

音 吉

村役人

六右衛門

人足 式人

常右衛門

吉 五 郎

九 平 次

寅年

○右衛門

幸 助

五郎右衛門

人足 式人

未年 村役人

吉 五 郎

平 造

小平次代

五郎右衛門代
惣右衛門代

音吉

常右衛門

助太郎

人足

平造

九平次

萬延元庚申年

小平次煩二付

吉五郎

四郎右衛門

助太郎

次郎吉

人足

平造

九平次

酉年

文久二戌年
村役人

吉五郎

次郎吉

元治元甲子年

村役人

人足

式人

彦右衛門

又七

平造

九平次

吉五郎

四郎右衛門

仙造

音吉

慶応元年

村役人

吉五郎

四郎右衛門

次郎吉

甚五右衛門

歌

笛吹

久五郎

泰藏

鍋造

増五郎

山神

森幸治郎

石川春太郎

早川佐五平弟子

増田由太郎

小澤庄三郎弟子

神田周太郎

野村伴治郎弟子

金子國太郎

田中久五郎弟子

田中丈四郎

(表紙)

明治貳拾四年

祭禮獅子連名帳

卯 十月廿三日

(柏原白鬚神社蔵)

獅子連中

堀川文吉

世話人

相原幸七

神田武七

早川榮太郎

早川佐五平

堀川文吉ユヅリ

山神

岡野由造

本役

斎藤仲造

獅子方

鈴木与治郎

本役

大河原元治郎

赤獅子

大河原元治郎

歌え方

山崎銀造弟子

早川仙松

沼崎太平弟子

沼崎弥平

岡野茂平弟子

増田定五郎

明治二十七年十月改

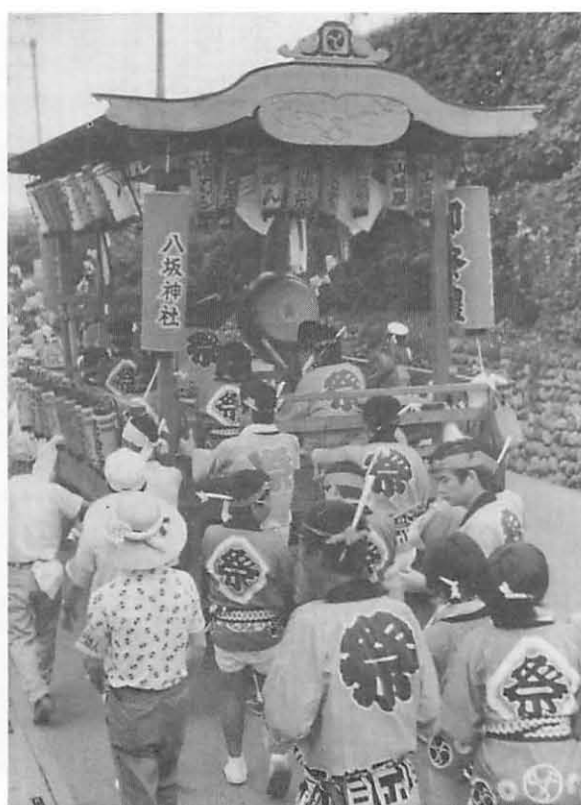
黒獅子	鈴木 幸治郎	鈴木 要治郎	野口 長三郎	市川 堅治郎	森 幸治郎	石川 徳治郎	森 三郎	野村 伴治郎	金子 國太郎	早川 佐五郎	増田 由太郎	岡野 熊吉	大河 運吉	田中 久五郎
本役	本役	本役	本役	本役	本役	本役	本役	本役	本役	本役	本役	本役	本役	本役

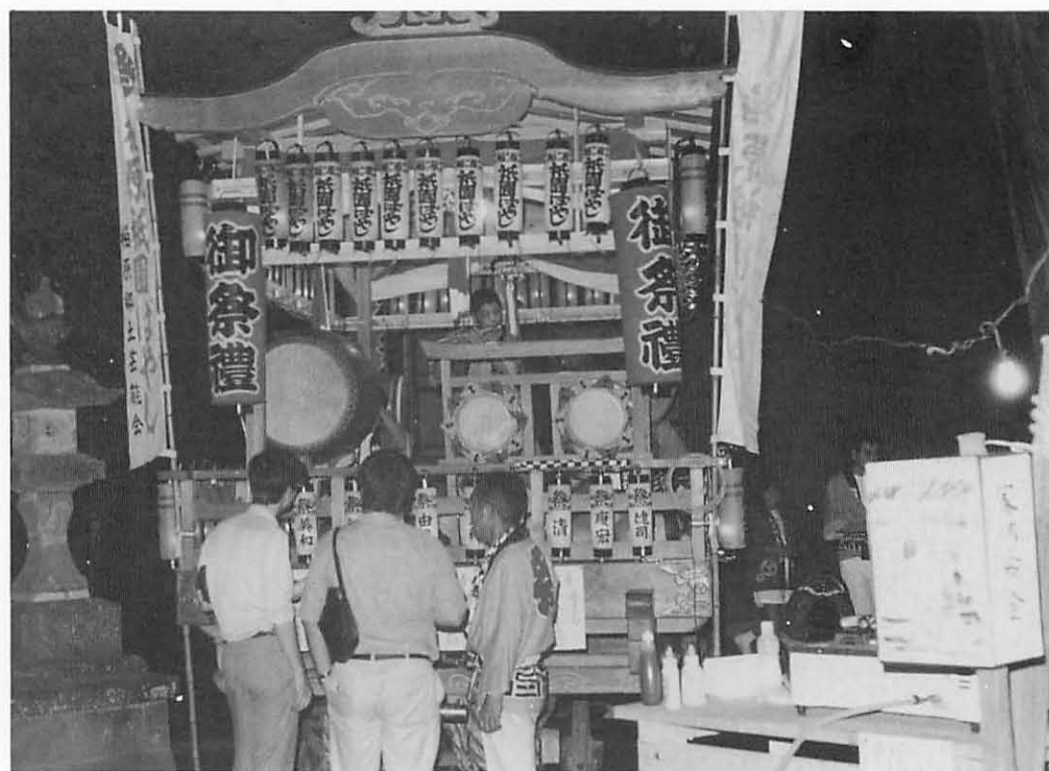
明治三十一年与四年改正
 明治三十二年十月改正

獅子世話人

田中 丈四郎	小澤 庄三郎	田中 五三郎	田中 松五郎	増田 定五郎	沼崎 弥五平	沼崎 太平	早川 仙吉	佐久間 房吉	市川 仙治郎	神田 武七	沼崎 太平	早川 佐五平	富澤 熊吉
--------	--------	--------	--------	--------	--------	-------	-------	--------	--------	-------	-------	--------	-------

柏原の祇園囃子







柏原の祇園囃子

柏原の祇園囃子は、毎年七月十五日に近い日曜日（昭和五十年以前は毎年七月十五日に行われた）に、柏原の八坂神社の夏の祭りの御輿・底ぬけ屋台の巡行に際して行われる囃子である。

この祭礼は「天王さま」と呼び慣わされ、夏に向かうこの時期に、神輿などの村廻りを行い、悪疫が流行^{はや}らぬよう村境等で祈る、いわゆる「夏祈禱^{なつきとう}」の行事である。柏原地区には次のような言い伝えがある。「昭和六・七年頃、田圃が天王さまの時期になっても仕付かない年があった。そこで村中相談の上、その年は天王さまの行事を中止することにきめた。するとにわか^{はや}に赤痢が流行^{はや}り出したので、改めて八月に天王さまの行事を行ったところ病気が治まったという」。

狭山市内では柏原の他にも、加佐志、沢、下奥富、入間川、青柳などの地区で天王さまの行事が確認され、報告⁽¹⁾されている。しかし、行事に祇園囃子が附随し、演奏される例は柏原が唯一であり、貴重な事例と考えるべきであろう。

一、八坂神社と天王さま

天王さまの行事の中心となる八坂神社は、白鬚神社の境内に

鎮座している。元々は現在地より南へ二〇〇メートルほどの所に旧境内地と伝えられる場所があり、そこに祠られていたものを明治四十五年に現在地に遷座したものである。

当社の創立年代は、つまびらかでないが、旧境内地には二丈二尺の根廻りを持つ大櫓が昭和五十年代まで存在していた。また日高町野々宮神社所蔵の天文十六年（一五四七）の「六所宮⁽²⁾祭事につき参集覚写」という文書には、「かしわ原の 天王之神主」という記載があることから創立が中世まで遡ることは確実であろう。それが近世に入ってから、白鬚神社とならんで、柏原村の鎮守として村人の信仰を集めた。

増田純子家（柏原一六六二）⁽³⁾所蔵文書の中に「午頭天王神輿再建立寄附帳（嘉永三・六）」「日本総社津嶋天王様永代一万座礼札（慶応四・八）」を見出すことができる。これらの史料から天王さまの行事は少なくとも江戸後期には盛んに行われていたと考えられる。さらに津嶋天王との関係を無視することはできない。天王さまの行事や、午頭天王社（八坂神社）には津嶋⁽⁴⁾の御師が関連し、その信仰を盛り上げていたと推測されるが、その点については他の機会に譲りたい。

当社は明治二年、神仏分離により旧来の名称であった午頭天王社を八坂神社と改称した。祭神は須佐之男命、天照皇大神、

^{すさのおのみことあまてらすのみこと}
おおかみ

かぐつちのみこと
○遇突智命の三柱である。

なお白鬚神社には天王さまの行事についての文書が三冊保存されている。「八坂神社渡行改正法式（大正九）」「祇園祭典費寄附連名簿（明治二十六）」「寄附金決算簿（明治二十六）」これらは天王さまの行事を知る上で有用と考えられる為に文末に資料1〜3として原文を掲載した。

二、天王さまの実際

柏原の天王さまは昭和三十年代を境としてその内容が幾分変化してきている。ここでは聞き取りに依って得られた昭和三十年代以前の天王さまの概要についておもに記し、その後現在に至るまでの経緯についても若干言及してみたいと思う。

天王さまの行われる毎年七月十五日頃は、農作業の一番忙しい時期にあたる。柏原では、六月二十日頃までに麦を刈り、田植を済ませて天王さまの頃には、田の一番草を取り終えると言うのが農作業の大よその目安であった。しかし、長雨や、干ばつなど天候不順によって、その時期が他の農作業と重なり、どうかすると、天王さまの時期に田圃が仕付かない年もあった。そういう年には、夜なべしてでも田植を済ませ、なんとかして天王さまの行事に間に合わせたものであるという。

村人は、天王さまの前には決して胡瓜は食べなかった。それ

は胡瓜の切り口が天王さまの紋所に似ていることがその理由であり、やむをえず胡瓜を刻むような時には予め、包丁を縦に入れてから細かく刻んだといわれる。

天王さまの日に、柏原の各戸では饅頭をこしらえる習わしがある。また嫁に行った人なども里帰りし、家族と一緒に天王さまを祝った。

天王さまの当日である七月十五日には、午後二時頃から御興の渡行が八坂神社（白鬚神社）を振り出しに始められる。天王さまの行列及びその所役は次の通りである。

金 棒	二名	
榊	二名	
賽銭箱	二名	
御 興	十六名	御興台 二名
底ぬけ屋台	八名	
氏子総代	七名	

金棒から底ぬけ屋台までの所役は、各組（昔は十六組、現在は二十二組になっている。）から一名宛（戸数の多い組は二人出る所もあった）出勤した。正式には公平を期する為にくじを引いて所役を分担するのだが、若い人には氣を利かせて、御興や底ぬけ屋台のくじを引かせた。所役に係わる人は、白丁に烏帽

子を着用したが底ぬけ屋台を担ぐ人は普段着であった。その他に各区から二名位「世話人」が行列に参加し、御輿の側につき、村廻りの御輿渡行に間違いの起こらぬように気を配っていた。

巡行前、行事に参加する者は「マキバライ」と称する半紙を巻いて竹串に貼りつけた幣束を、エモンに差して出発する。若者に担がれた屋台には、白や赤や黄色の水引きが掛けられていた。

巡行の順路は一年おきに上宿うわじゆくから先に廻る年と下宿したじゆくから先に廻る年があった。

上宿と下宿では次の場所に神酒所(5)が設けられた。

◎上宿

増田本家の庭―東組公民館―宮原早川の庭―辻―小谷野儀平氏の屋敷

◎下宿

小田酒店前―竹内氏前―土橋―長谷川氏前

神酒所では行列が到着すると、神官が厄病を避ける神詞を奏上し、酒やトマトやキュウリが振舞われた。神酒所の近所の人達も御輿をお参りに来て賽銭をあげていった。

若者によって担がれる御輿や底ぬけ屋台は神酒所の酒が廻ってくるにしたがって、とかくその行動は乱れがちであった。柏原では御輿は亭主に、底ぬけ屋台は女房にたとえられている。

底ぬけ屋台が女房役をこなして、亭主（御輿）がスムーズに進められるようにリードしたという。

行列の通る沿道には、地口絵などを貼った燈籠が立てられた。燈籠の木枠は各組の膳碗置場に普段は仕舞われている。入間川の天王さまは提灯ちようちんを吊すが、柏原は燈籠を出すという。日が暮れて燈籠に灯が入る頃になると、祭りも最高頂になり、気分も盛り上ってくる。

行列が上宿・下宿の神酒所をすべて廻りおわり、八坂神社に戻るところは夜も可成り遅くなっている。現在は午後九時頃に行列は神社にもどり、手打式、御輿の魂戻しみたまもどなどが行われる。「資料3」によれば、大正九年の段階では上宿の辻に仮屋が設けられ、そこに御輿は一晚安置されて翌十六日の朝、八坂神社へ戻したようである。

大正時代からは上宿の桜沢弥三郎という人の発案で、天王さまの子供の御輿が造られた。上宿・下宿の各々の地域で子供達が集まり、それを担いだり、また篠竹に小さな提灯を下げたものを持ちたりして昼間のうちに実際の行列とは別に地域内を廻った。子供御輿は上宿は増田本家に下宿は長谷川本家に仕舞われていた。現在でも子供御輿は子供会に引き継がれて行われている。

天王さまの翌日の十六日には、祭り勘定が行われた。着用した白丁などを干したり、底ぬけ屋台を解体して八坂神社の縁の下へ仕舞うなどの作業をして、天王さまの行事は終了した。

以上、柏原の天王さまについて記してきたが、この祭りも昭和三十年代半ばからは行列は中止となり、御輿をトラックに乗せて地区内を渡行するように簡略化されてしまった。祇園囃子も後継者がなく、道中はトラックから祇園囃子の録音テープを流し、神酒所で演じられるのみとなってしまった。

しかし昭和四十八年柏原公民館の主催事業「郷土芸能を学ぶ会」で祇園囃子を取り上げられた。そしてその会の有志により「柏原郷土芸能会」が発足し、小学生などへの祇園囃子の伝承、天王さまの行列の復活など地域への働きかけを行った。その結果、昭和五十年には車付きの屋台が完成し、行列が昔のように地区内を練り歩くようになった。また市制三十周年記念の時には旧来の底ぬけ屋台も復活した。現在天王さまは「柏原郷土芸能会」を核として、新興住宅地などへも、新しい祭りの輪が広がられつつある。

三、祇園囃子について

祇園囃子の演奏は天王さまの行列が村廻りをする際に底ぬけ屋台で行われた。現在では旧来の村廻りの際には車付きの屋台

の上で演奏される。

祇園囃子は現在は前述した柏原郷土芸能会によって伝承されているが、かつては地区の有志によって行われた。獅子舞の笛を吹いた人が祇園囃子の笛を吹いた例も多く、特に組織的なものはなかった。

起源については明らかでないが、一説によると人間市高倉から伝授を受けたとも伝えられる。高倉の天王さまと柏原の天王さまは祭りの形態で共通点も多く、音楽的観点から系譜について考えてみる必要があると考えられる。

楽器構成はツケ（小太鼓）一、オオドウ（大太鼓）一、笛一、であり、ツケとオオドウは底ぬけ屋台に括りつけ、その中で演奏され、笛は外側で吹く。現在、車付きの屋台で演じる時にはツケを二つにして行う。

曲目は「オクリ」と「シチョウメ」の二曲がある。オクリは一の切（一番）から六の切（六番）までの六つの旋律を天王様の行列が進行している時に繰返し演奏するものである。旋律の切れ間には「ヨイコーラセー」などの掛け声が入り、行列の進行にふさわしいゆったりとした囃子である。このオクリは笛は大勢で一緒に吹くものである。

「シチョウメ」は御輿が神酒所に到着し、台の上に安置されて

いる時に演奏される。この曲はオクリのゆったりとしたテンポとは対称的に、軽快でリズムカルであり神輿が神酒所に止っている間、神酒所の雰囲気盛り上げるのに効果がある。この曲は笛は一人で吹くことになっており、祇園囃子の聞かせどころである。

話者

柏原二三〇二 小谷野金作 大正十五・四・十九日生
" 一二五五 宮本重信 昭和九・四・二十日生
" 一六二八 増茂徳造 明治三十五・四・二十五日生
" 一五一七 久保田太一郎 大正十五・十一・六日生

(小峰 孝男)

註

- (1) 『狭山市史 民俗編』(狭山市史編さん係 昭和六十年)
- (2) 『所沢市史 中世史料』(所沢市史編さん室 昭和五十六年 頁四三四)
- (3) 『狭山市古文書目録 第二集』(狭山市史編さん室 昭和五十三年)
- (4) 津島の御師と天王さまの行事については大館勝治が『入間市史、民俗・文化財編』(入間市史編さん室 昭和五十六年)の「高倉の祇園太鼓」で指摘している。

(5) 現在(昭和六十一年)では神酒所の位置は多少異なっている。

(資料1) 八坂神社渡行改正法式

(柏原白鬚神社蔵)

(表紙)

「八坂神社渡行改正法式

入間郡柏原村」

今般八坂神社御輿村内渡行ノ法式明治十五年議定書ノ一部ヲ改正シ大正九年度ヨリ執行スベク氏子一統左記ノ通り議定スルモノ也

第一條 村吏並ニ當番世話人ヲ除ク外氏子悉皆役付異議無之事

第二條 祭禮ニ付テハ氏子惣代人の指圖に依り従事可致事

第三條 祭禮諸買物ハ該月四日區世話人集議ノ上本宿上宿隔年

ニ買物ニ行クベキ事

第四條 渡行順路ハ古来ノ通り

第五條 本年度ヨリ在郷軍人分會員八名警護ノ任ニ當ル事

第六條 神輿渡行ニ對シ不敬ノ乱暴ノ行為無之様各區長ニ於テ

責任ヲ以テ各區員ニ訓示スル事

第七條 神輿ハ毎年四月十四日午前一時ニ掛員參集シ二時出輿

シ村內順路ヲ渡行シ最終上宿辻ノ御飯屋ニ奉置シ十五

日午前九時迄ニ本社ヘ還御ノ事

第八條 十五日ハ祭典當日氏子一同參拜ノ事

第九條 以上ノ外ハ旧慣ニ依ルモノナリ

神輿渡行々列順序

- | | | |
|------|------------|-----|
| 第一例 | 榊 | 貳名 |
| 第二例 | 長燈籠 | 貳名 |
| 第三例 | 祠堂 | 壹名 |
| 第四例 | 氏子總代 | 參名 |
| 第五例 | ○析 | 貳名 |
| 第六例 | 長燈籠 | 貳名 |
| 第七例 | 警護 在郷軍人分會員 | 四名 |
| 第八例 | 全上 區世話人 | 十四名 |
| 第九例 | 錢箱舁 | 貳名 |
| 第十例 | 神輿 | 十八名 |
| 第十一例 | 警護 在郷軍人分會員 | 四名 |
| 第十二例 | 全上 區世話人 | 十三名 |
| 第十三例 | 長燈籠 | 貳名 |

第十四例 神輿台

貳名

第十五例 屋台

二十四人

太鼓掛

第十六例 村內一統

右之通り議定候也

大正九年四月

入間郡柏原村氏子總代

- | | | | | | | | | | | | |
|--------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|--------|
| 齋藤 新太郎 | 沼崎 林平 | 市川 小代吉 | 早川 繁造 | 岡部 幸作 | 鶴見 波吉 | 金子 茂吉 | 增茂 枝良 | 沼崎 喜一 | 森源三郎 | 增田 庄造 | 增田 惣五郎 |
| ⑩ | ⑩ | | ⑩ | ⑩ | ⑩ | ⑩ | ⑩ | | ⑩ | ⑩ | ⑩ |
- 區世話人
- | | | | | | | | | |
|-----|-----|-------|---|-------|---|-------|-----|---|
| 宮原區 | 横宿區 | 東上ミ宿區 | 全 | 西上ミ宿區 | 全 | 中上ミ宿區 | 中宿區 | 全 |
|-----|-----|-------|---|-------|---|-------|-----|---|

下毛宿区

小谷野 徳次郎 印

全

久保田 文次郎 印

正北区

早川 彦三郎 印

全

吉田 源次 印

本北区

北田 久造

全

増田 常造 印

入区

半貫 良吉 印

恵花区

大河原 林造 印

全

長谷川 融 印

甲斐屋区

忍成 与七 印

全

長谷川 辨太郎 印

中区

市川 鉄五郎 印

全

田中 弥吉 印

新田区

神田 濱造 印

全

田口 福太郎

宿田区

田中 馬造 印

全

齋藤 鍋造

(表紙)

「明治廿六年七月

祇園祭典費寄附連名簿

神徒総代」

祇園祭典費寄附連名

上宿組

増田 由蔵

石川 鉄五郎

平本 さだ

増茂 文二郎

沼寄 正作

岡野 音五郎

岡野 熊吉

齋藤 角蔵

金子 周吉

竹井 庄蔵

増茂 兼吉

沼寄 繁太郎

齋藤 幸吉

(資料2) 祇園祭典費寄附連名簿

(柏原白鬚神社蔵)

齋藤 太四郎

金子 園三郎

山崎 亀吉

沼寄 岩三

金子 房五郎

金子 半太郎

金子 三次郎

金子 茂吉

金子 太重郎

児玉 今五郎

大河原 善太郎

神田 時太郎

増田 仙太郎

小計 金壹圓〇九錢也

中上宿組

森 幸二郎

沼崎 林平

森 清吉

森 嶋吉

石川 豊平

増田 勝五郎

久保田 亀吉

森 弁二郎

森 関造

小計 金四拾錢也

横宿組

横宿組中

小計 金壹圓也

下宿組

久保田 太三郎

下宿組中

小計 金壹圓也

中宿組

増田 忠順

増田 彦四郎

小谷野 勇七

吉田 庄吉

吉田 喜三郎

小谷野 友太郎

弓矢 重蔵

宮原組

小計 金四圓九拾錢也

早川 近太郎	渋谷 又造	小林 民治	増田 惣太郎	増田 勝吉	増田 源太郎	岩崎 佐吉	小谷野 濱太郎	野口 高二郎	増田 浦太郎	増田 忠二郎	岡部 吉五郎	吉田 三吉	増茂 與七	並木 彌吉	嶋村 勝三郎	新井 荒二郎	松岡 元三郎
--------	-------	-------	--------	-------	--------	-------	---------	--------	--------	--------	--------	-------	-------	-------	--------	--------	--------

北組

小計 金壹圓〇八錢也

神田 伴二郎	神田 増五郎	野口 太四郎	増田 彌市	宮本 十守	早川 豊二郎	吉田 孫二郎	半貫 伊三郎	齋藤 新太郎	吉田 七郎	早川 弁太郎	早川 丹二郎	早川 佐五平	師岡 代二郎	増田 幾太郎	吉田 金二郎	早川 萬太郎	早川 玉藏
--------	--------	--------	-------	-------	--------	--------	--------	--------	-------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	-------

新田組

小計 金參圓七拾四錢也

忍成玉吉	神田元二郎		小山保	吉田安五郎	犬竹○三郎	増田浪二郎	半貫国五郎	吉田小三郎	吉田増五郎	半貫春造	吉田吉二郎	吉田丑五郎	富沢熊吉	早川千松	神田金太郎	吉田與太郎	早川又四郎	吉田喜四郎
------	-------	--	-----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	------	------	-------	-------	-------	-------

入組

小計 金四拾七錢也

斎藤兵三	田中與五郎	齋藤幸二郎	半貫峯二郎	野口武八	齋藤市太郎	齋藤為二郎	長谷川雅太		田中勝五郎	田中龜太郎	竹内源太郎	田中榮造	忍成増五郎	田中増五郎	田中吉五郎	田中由太郎	田中兼吉	竹内定吉
------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	--	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	------	------

中組

小計 金參圓拾八錢也

田中榮太郎	田中五平	田中鉄五郎	半貫良吉	齋藤松太郎	才藤伊三郎	才藤善吉	神田角二郎	齋藤作二郎	豐泉嘉四郎	齋藤徳太郎	長嶋太吉	齋藤彦太郎	半貫金治	野口由蔵	長谷川百太郎	野口和吉	齋藤春五郎
-------	------	-------	------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	------	-------	------	------	--------	------	-------

甲斐屋組

小計 金壹圓九拾參錢也

半貫忠五郎	田中喜平次	田中善吉	田中久太郎	田中岩五郎	田中勘七	神田久太郎	田中太郎	山崎梅吉	山崎相二郎	市川帛吉	田中権八	田中専蔵	神田安二郎	田中仲二郎	齋藤安五郎	田中馬蔵	岸田入三郎
-------	-------	------	-------	-------	------	-------	------	------	-------	------	------	------	-------	-------	-------	------	-------

恵花組

小計 金壹圓八拾七錢也

忍成國五郎	忍成庄七	神田周太郎	佐藤宅藏	小田平太郎	志村厩二郎	神田豊太郎	神田浦太郎	神山卯八	神田辰五郎	鈴木仁作	長谷川勇吉	市川九平	富沢作三	佐久間房吉	市川和二郎	市川仙二郎	鈴木勇造
-------	------	-------	------	-------	-------	-------	-------	------	-------	------	-------	------	------	-------	-------	-------	------

總計 金貳拾參圓〇壹錢也

小計 金貳圓參拾五錢也

鈴木金次郎	大河原元二郎	小沢米造	小沢正三郎	鈴木濱吉	市川嘉吉	市川龜二郎	小沢平七	鈴木要二郎	山崎音二郎	長谷川平吉	半貫萬三	富沢庄七	山崎〇三郎	富沢平六	市川竹二郎	山崎代二郎
-------	--------	------	-------	------	------	-------	------	-------	-------	-------	------	------	-------	------	-------	-------

(資料3) 祇園祭典寄附金決算簿

(柏原白鬚神社藏)

(表紙)

「寄附金決算簿」

廿六年祇園祭典費寄附金支払決算

収入ノ部

一金壹圓〇九錢 上ミ宿組

一金四拾錢也 中上宿組

一金壹圓也 横宿組

一金壹圓也 下モ宿組

一金四圓九拾錢 中宿組

一金壹圓〇八錢 宮原組

一金參圓七拾四錢 北組

一金參圓拾八錢 入組

一金壹圓九拾參錢 中組

一金壹圓八拾七錢 甲斐屋組

一金貳圓參拾五錢 恵花組

一金四拾七錢 新田組

計 金貳拾參圓〇壹錢也

支拂ノ部

一金拾圓五拾錢 白張二十枚 川越麻伊ニ拂

一金壹圓也 烏帽子二十 本町提灯屋ニ拂

一金壹圓五拾錢 榎台 建具屋兵三ニ拂

一金貳拾四錢 揭示用杉めじ板三枚 建兵ニ拂

一金壹圓五錢 神輿金物直シ代 六軒町飾屋

一金貳拾錢 社入箱ノ代

一金壹圓〇貳錢五厘 雨屋修繕費 半貫忠五郎

一金四拾錢 川越行弁当料

一金參拾九錢 雜費

一金壹圓拾四錢八厘五毛 例祭費不足ノ分

計 金拾七圓九拾錢參厘五毛

収支差引 金五圓拾錢六厘五毛

過剩

右ノ通り

明治廿六年七月十七日

信徒總代 齋藤 松太郎

増田 幾太郎

小谷野 勇七

上広瀬信立寺のおめいこ







上広瀬信立寺のおめいこう

本稿で触れるおめいこうは「御命講」のことで、日蓮宗の寺院に於いて宗祖である日蓮上人の忌日に行われる法要とそれに関わる諸行事の総称である。現在では一般に「御会式」と呼ばれる行事となっているが、上広瀬及びその周辺の人々は、今なお「おめいこう」と呼び慣わしている。

日蓮宗郎門流の大本山である池上本門寺のお会式は、日蓮上人入滅の聖地であることによって特に盛んに行われていた。この行事も以前は御命講といい、毎年十月十一日から十三日を中心に前後数日間にあたる行事期間のうち、日蓮の命日の前夜（逮夜）には万燈供養が花々しく行われ、たいへんな賑わいを見せる。『絵本江戸風俗往来』からその様子を引用してみよう。

例年十月十三日は日蓮聖人御入滅の当日とて、同宗の寺院へ会式詣多く、池上本門寺はまた別段なりしより、江戸及び近在のありとあらゆる法華講中、毎講万燈を作り、大勢群をなして、団扇大鼓、題目の響き、高輪あたりへ引きもきらず、日暮れ前より押し出すこと夥しく、老若男女遠慮憚る会釈もなく、ただ信念はこれなりと、思い思いの手拭、その品川は

大森辺、はや池上へつかれも忘れ、これ南無妙法の徳なるべく、天下泰平はすなわちこれなり。

かつて池上本門寺の近郊が農村であった当時、取り持ち講と呼ばれる題目講が、農産物を大量に奉納する等、万端の用意を担当した。取り持ち講は付近の農村一帯の日蓮宗信者の信仰を基盤とした団体であり、そういった基本的にはムラの題目講の結果が華やかなお会式を支えていたのである。

池上本門寺のお会式について少々記してみたが、上広瀬信立寺のおめいこうを考える上で、池上の事例はその母体とでもいうべきものであるからである。それは池上本門寺が信立寺の本山であるためでもあるが、本稿では池上との関連を含めて、信立寺のおめいこうの大略を記してみたい。

一、信立寺について

信立寺は山号を惺案山といい、日蓮宗の池上本門寺の末寺である。開基は、加治左馬助・丹治家信といわれ、開山は池上十二世仏乗院日惺である。創立の年代は、古記録によると天正六年（一五七八）となっているが、天正末から文禄期と考えるのが妥当なようである。その頃の遺物として、文禄三年（一五九四）に加治左馬助が寄進した鰐口と土佐光吉の筆になる左馬助の肖像画がある。

その後、鬼子母神堂・鐘楼・梵鐘等が建立され、現在のよう
な山容がととのえられるのは江戸中期頃のことである。正徳四
年に佐野天明町（栃木県）で鑄造した鐘は太平洋戦争中に供出
してしまった。この梵鐘の勸化^{かんげ}や先にのべた鬼子母神堂（清
正堂）の建立を行ったのが、信立寺十一世（十二世？）の法珠
院日了であり、近隣への信仰の普及や、壇家の拡大等を進め、
題目講等が発生していく基盤が出来たのがこの頃ではなかつた
かと思われる。それは勿論おめいこの発生とも関わる問題で
ある。資料の上から題目講の存在を知るものとして、信立寺参
道の傍に立つ題目塔がある。これは安永五年（一七七六）の造
立であり、正面には「南無妙法蓮華經 法界」と彫られている。
法界と俗界の境界を示す「結界石」ともなっている。

いずれにせよ、そのような題目講の活動を中心として「おめ
いこう」が盛大に執行されるようになったことは間違いないま
い。その時期は江戸末期頃ではあるまいか。明治期を通して戦
前まではその伝統が続いていたのである。

二、おめいこの組織と諸準備

上広瀬信立寺のおめいこうは戦前は十一月十二日・十三日と
両日にわたって行われたが、現在では十一月十二日のみ行われ
ている。日蓮の忌日は十月十三日であり池上のお会式もその前

後に行われるが、広瀬ではその時期がちょうど稲の取り入れと
麦蒔きの季節に当たるために、月おくれに行ってきたものだと
いう。戦前は題目講が行事の準備を進めたが、現在では檀家総
代を始めとした寺の役員によってすべてが準備される。内訳は
檀家総代一名・副総代二名・常任委員四名・鬼子母神様の係三
名・委員六名とその他の有志者五、六名が中心となって行事を
すすめる。

毎年十一月に入ると、会合を開き役員が相談して仕事を分担
する。まず行われるのが釣万燈の寄付集めである。釣万燈は、
おめいこの日に参道の両側に吊るされる高さ三〇センチメー
トル位の燈籠で上部には竹串に紙花がつけたものが差してある。
燈籠の回りには日蓮上人にちなんだ絵が描かれている。これが
全部で百個位もつけられる。おめいこの一つのシンボルであ
る。釣万燈の寄付は主に商店で、上広瀬・下広瀬を中心とした
水富地区や入間川・豊岡などまで集めて回る。主に広瀬から出
た（出身の）商店主などは特に協力してくれるという。

また広瀬を中心とした檀家からもかつては、その年に収穫し
た新米（餅米）を集めて回り、それを餅に搗いたり、お籠りの
際の食事などに充てた。そしておめいこうが終えると、餅一片
にお札を添えて米をもらった檀家へ配ったといわれるが、戦後^①

はお籠りの行事もなくなり、檀家から米を集めることもなくなってしまう。

九日ごろに、餅搗きが行われる。昔は三俵以上搗いたというのが現在では七、八斗位搗き上げるが、その方法も器械で搗くように変化してしまった。

十一日は寺内の飾りつけが行われる。参道から境内に釣万燈を飾ったり、本堂内の供物や荘厳等が行われる。特に記しておかねばならぬのが、本堂内の餅柱の製作である。餅は三色あり、赤と緑と白でこれを搗き上げ、五センチメートル×四センチメートル位の大きさに裁断する。これを須弥壇の両脇の丸柱の周囲にあたかも積木をつむように積み上げてゆくのである。実際には表から見える部分のみ餅をつんで柱の裏側にはつまれていないが外から見ると、餅の塔が二つ本尊の前に建っているように見えたという。高さは二メートル以上も積んでその上には吉野桜を表わしたという紅白の花（紙製）がつけられ、これを吉野花といった。餅柱も戦後は中止となり、現在では、飯台に小さく切った餅を山盛りにして、それを二つ須弥壇の前に置くようになっている。

三、おめいこうと万燈行列

信立寺のおめいこうは、戦時中に一時中断したという。

戦前までは入間川・笹井・飯能等から万燈行列が繰り込み、十二日は、大変な賑わいであった。入間川では馬場さんという人が立正講の世話をしており、万燈行列は板倉さんという家具屋から出たという。行列が出発するに際しては信立寺側で迎えを立て、万燈を先頭にした団扇太鼓の行列が入間川から唱題を絶やさずに信立寺まで練り込んできたものであるという。笹井は河原の升屋から行列が出たという。当然ながら参詣人も大勢でたいへんな賑わいであった。参道周辺の稲刈の済んだ田圃には「見せ物」や芝居がかかったという。

戦後、そういった講中の万燈行列の奉納がなくなってしまうのを惜しんだ故宮野九三氏が自力で万燈行列を復活、現在子息の義雄氏がその伝統を継いでいる。狭山市史・民俗編の二二七―二八頁に宮野家から信立寺にむかう万燈行列についての記述があるので引用してみたい。

さて、昭和五十五年十一月十二日のお命講の概況を述べる
と次のとおりである。

夕方七時ごろ、宿の宮野氏宅の大座敷に、婦人を主とした五〇名前後の講中が集まるところに、信立寺より総代二人が提灯をともに迎えにやってくる。宮野家の仏壇は花や供物で荘厳され、灯籠に輝きを増し、正面の神棚と床の間

には、新しい注連縄が張られ、灯籠・供物で美しく飾られている。入って来た二人の総代は一番下座に座り、口上を述べたのち、一同酒肴でしばらく宴がはずむ。やがて当主宮野氏の合図で一同仏壇の方に向かい、団扇太鼓を鳴らしながら高らかに南無妙法蓮華經のお題目が唱えられる。

午後八時になると万燈を先頭に、約三〇〇メートルほどの信立寺迄の道を、太鼓とお題目も高らかに行列が続く。……宮野家では毎年二本の万燈を準備し、おめいこうに参加している。

万燈行列が信立寺に着くと団扇太鼓のおばさん達は本堂にあり、お上人と一緒にしばし、お題目を唱える。この間は法要の最高潮ともいうべきところで、題目の響きに一同は法悦の境地にひたり、それが見るものにも伝わってくる程である。題目が一段落すると餅撒きが始まる。本堂の向かって左側に餅撒きをする台がしつらえられ、参詣人に餅が撒かれる。餅には五〇円・一〇〇円・五〇〇円などの金券のついたものがあり受付で現金と引き替える。最近では笹井在住の作曲家関口重夫氏によって「おめいこう音頭」が作曲され、行事に花を添えている。

四、おわりに

筆者は以前に所沢市山口観音の十夜講⁽²⁾について調査を行った

ことがある。浄土宗から源を発した十夜講と日蓮宗の宗祖の忌日の法要である御命講とは念仏と題目との相違はあるにせよ、行事の本質的な部分は非常に似ている。十夜の花と御命講の万燈の花は、ともに稲の予祝を示しているといわれる。参籠の行事も共通のものである。つまり秋の代表的な仏教行事である両者は共に民間在来の収穫祭としての行事を基盤としているのである。それがために上広瀬のおめいこうも長い伝統を保ってきたのであろう。

(小峰孝男)

註 (1) お礼には次の様な文字が書かれている。



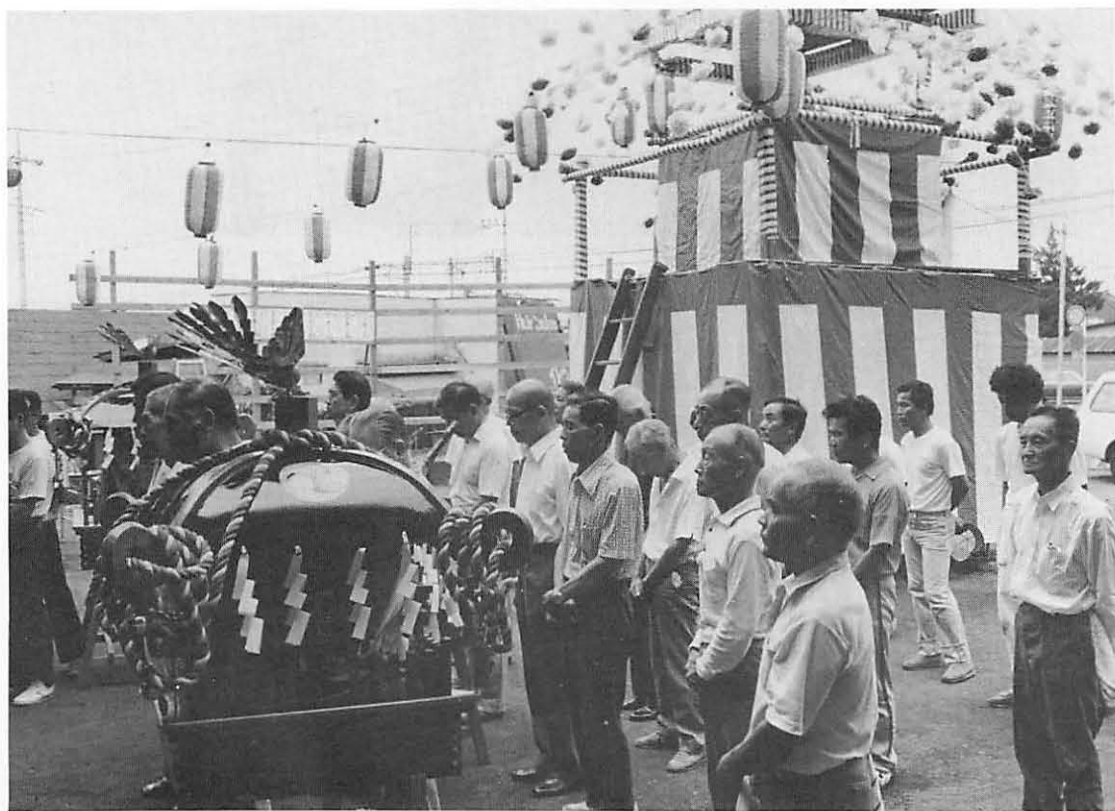
(2) 『所沢市史 文化財・植物編』 昭和六十年

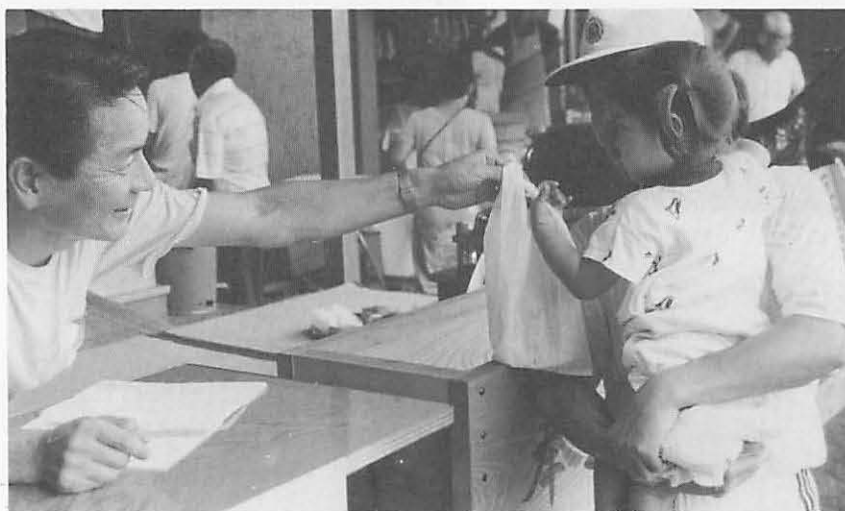
参考文献 『仏教民俗学大系6 仏教年中行事』 名著出版

話者 宮野義雄 昭和五年四月四日生

諸井武三 大正元年十一月二十八日生

諏訪神社のなすとりかえ
(なすまつり)







諏訪神社のなすとつかえ

(なすまつり)

一、諏訪神社（おすわ様）

諏訪神社は長野県諏訪大社の分社五〇七三社のうちの一社といわれ、入間川の諏訪地区で管理してきた社である。新編武蔵風土記稿によると、八幡社、牛頭天王社、八幡社（清水八幡）などと共に成円寺の持となっている。祭祀された時代については一説には天正年間といわれているが定かではない。

諏訪地区（現、上諏訪と下諏訪）は元禄年間の絵図（上広瀬山崎滋夫家所蔵）には数軒が記されているにすぎない。地区内の主な苗字は、遠藤、宮木、岡野、島崎などでいづれも入間川の農家の分家が住みつき開いた土地であろう。

二、なすとつかえの由来

諏訪神社の祭りは年に一回、八月二十六日、二十七日の二日に渡って行われていたが、現在では八月の第四土曜、日曜日に行われるように変わってしまった。祭りの組織や祭事などの項目については後で触れるとして、ここではなすとつかえについての伝説について述べてみたい。

諏訪神社の北西部はハケの上に民家が建ち並らびハケのすぐ下からは湧れがあり田んぼが開けていた。神社の裏手には「オスワの沼」といわれる沼（池）があった。現在は沼の姿は跡かたもなく住宅となってしまっている。この沼は昭和七年頃までは存在していたが、その頃稲荷山の陸軍の施設（旧陸軍航空士官学校、現在の入間基地）へつながる道路（旧石無坂）の改修を昭和八年頃おこない、その時に余った土砂で埋めてしまったといわれる。なすとつかえの伝説は、この沼と龍（蛇）にかかわるものである。以下紹介してみたい。

ある夏の朝、村の娘が草かりのかえりみち、畑から茄子をもいでカゴに入れ、神社のわきの池のはたを通ると、おりから池の中から水しぶきがたち、バシバシと物すごい音がする。のぞいてみると龍神が夏病にあてられて七転八倒の苦しみ、そのおそろしい姿に、娘はキャッと叫ぶと共に茄子の入った草刈りカゴを池の中にほうり出して夢中で家へ逃げ帰った。これを聞いてかけつけた村人と共にこわごわと池のほとりに行き、そっと池をのぞいてみると、カゴと刈草だけがうかんでいて茄子は一つもなく、きれいに龍神にたべられていた。その後村人はすっかり健康回復した元気な龍神の姿をときどき池の中にみかけるようになった。村人はこの話をきいて神社に茄子をそなえ、

龍神の健康を祝福すると共に、龍神から茄子をいただいて喰べるようになり、これをするとう病は不思議にもケロリとなおる。近郷近在にこれが知れると茄子とりかえの信者が続々おまつりに来、いつか夏祭りの日の恒例行事となっていました。（人間川町誌より）

諏訪神社が祭祀されるモチーフとなったものが、峠下に広がっていた「龍神の池」とこの伝説から推則されよう。

三、草相撲の奉納

諏訪神社のなすとつかえでは、大正後期頃まで草相撲を奉納するのが恒例であった。

毎年祭礼が近づくと諏訪町の有志達は境内中央に土俵を造り草相撲の準備をした。土俵には四本柱を立てて、すだれを四方に垂らした。相撲は堀兼、奥富、水富、霞ヶ関、入間川、入間など一町六ヶ村の力自慢の若者が参加した。勝った者には賞品が出された。

相撲は八月二十六、二十七日の二日間、夕方から夜十時頃まで行われた。神社の境内の隅にスエ風呂を置いて、相撲をとり終った若者達は順番に風呂に入り疲れをいやした。

元来、諏訪神社は相撲の神様といわれており、昔は拝殿の中に相撲の番付が掛けられていたという。幸楽という料亭の近所

に住む小林靖彦さんの祖父（小林惣吉さんは昭和十七年二月五日死去）が「ハチマンコウ」（八幡講）といわれる素人相撲の会の親方をしていた。また諏訪神社の拝殿の中には、相撲の番付が掛けられていたこともあった。青年の相撲の他にも地区内の子供が相撲を取ったりもした。素人相撲は昭和初期までしていたが、賞品代その他の出費が多く経費倒れし現在は姿を消してしまった。

四、祭りの組織と内容

現在「なすとつかえ」の行事や諏訪神社の管理一切は上諏訪の自治会が行っている。古くは、諏訪町の鎮守であったが、昭和九年頃祭典費がかさんだことや、移り住む人が増え諏訪神社にあがった財銭の配分で諏訪町内でのトラブルが多発した。昭和十二年には日支事変が勃発、国防組織を作るため、上、下諏訪町に分かれる。たまたま戸数割で線引きした際、諏訪社が現在の上諏訪町分に位置したため、それ以来諏訪社の管理は上諏訪で行なっている。

昔の諏訪町では、高のオヒマチ（旧お食事処「玉川」現在中華料理光陽楼と消防団第二分団第二部の消防団員詰所）玉川に年一回（正月）集り御嶽講、八幡講、ヒラカタのお獅子等について話し合いをし、祭典の係四人選出した（現在は自治

会組織の中に行事がある。選ばれた四人を四人師と呼んだ。

四人師は八月二十六日、二十七日の諏訪社の祭礼（ナスストッカエ）と五月五日に行われる庚申様（現在の「もん平鯨」前の庚申塔）の祭礼の世話をする仕来りであった。現在では庚申様の祭礼はさほどにぎやかには行われていないが、昔は紅白の幕を張りお神楽などがかったこともあるように諏訪町をあげてのお祭りだったのである。

諏訪神社の「なすとつかえ」はその四人師の祭典費あつめから始まる。四人師は帳面を作り、諏訪町の一軒一軒から祭礼費をあつめて廻る。特に額は決っていないが、その家の経済力に応じて出したものであるらしい。昭和五、六年時分で一軒当り三十銭から十銭位であった。

また、諏訪町の全員が集つての、幟立て、お仮屋づくり、絵燈籠立てなどが行われた。お仮屋とは、本殿の前に丸太で組んで屋根をつけた小屋を祭礼の二日間だけつくって受付やナスの受け渡しをする場所のことである。絵燈籠は、俗に「地口絵」といわれる面白い言葉や絵を貼ったもので、神社の廻りの道に立てられた。

八月二十六、七日の祭典には、前述のように余興の相撲や、また囃子なども行われた。戦争前には広瀬や入間市高倉、入間

市新久などの囃子連を頼んでやってもらった。

また、地元でも囃子を習おうという計画を立てて、高倉から指導を受けたこともあったが、戦後にはなくなってしまった。また、芝居がかかったこともあり、これは奥富の石山さんという興行師が請負ったもので尾崎常夫さんの父親がこの太鼓たたきをしていたという。

「なすとつかえ」は、とにかく入間川では一番の「マチ」といわれ、昭和三十年頃まではとても賑やかな祭礼であった。茄子を取りかえに来る人は入間川はもとより柏原、水富、奥富、入間、堀兼、遠くは川越の大東の方からもやってきた。だいたいい、茄子を五ツ位持ってきて、神前の茄子を三ツ位もって帰るのが普通であった。

昭和三十年頃の「なすとつかえ」の様子を入間川町誌から窺ってみよう。

祭りは毎年八月二十六日、七日の両日で、午後から夜の十時ごろまで続き、遠く数里の村々から茄子を取かえに集る善男善女の群で境内はごったがえす。中でも二十六日の夕刻は一番にぎやかで、神前で七人の臨時の神主さんが汗だくで次々取りかえを行っても列が出来る程のにぎわいである。数百年来の奇習乍ら今尚年毎に善男善女の数はいふえるところで

ある。

参詣する人は何れも自作の茄子を一人で数個づつ、多いのは二、三十個も神前に奉納し、その代りすでに供えてあった別の茄子をもらうのである。つまり茄子の取りかえっこをする。これをうやうやしく持帰って、家内中で煮て食べると、その年の流行性悪疫は勿論、暑気あたりなど疫病一さい靈驗あらたかだと伝えられ、今では、之は豊作の祈願までもこめて農村の人が圧倒的に多い。(中略)

この神社は信州諏訪神社の分霊で、祭神は建御名方命、この神様は勇武の神であったので近村の若者は祭神にあやかるために、夏祭りには草相撲の奉納を行なうようになった。豊作祈願としては、龍神は諏訪神の御使でその姿がおそろいので養蚕家のねずみよけ、あるいは苗代をあらす野ねずみよけにこの茄子と御札が卓効があると伝えられている。未だにこの社には格子戸に繭などがかけられているのは養蚕家の信心のあらわれである。(入間川町誌より)

取りかえられた茄子は「クスリモノ」と呼ばれ珍重され、家中で悪病に罹らぬようにとの願いを込めて食べたのである。また、入間川町誌からは、野ねずみよけの信仰もあったことが窺える。

このなすとつかえの行事には、昔から八幡様の青田神主が二日間来て(現在では神事のみ)茄子をとりかえて、奉納金や残った茄子は青田神主が持って帰ったといわれる。

五、現在の「なすとつかえ」

前述の如く、この祭礼は昭和三十年頃が一番人出が多く雑踏をきわめたようであるが、その後は参詣者も少なくなり、行事自体も変わってきている。近年は入間川周辺の農家では茄子もあまり作られず、わざわざ八百屋から買ってきてビニール袋に入れ、神前に捧げそれを販売する様になってきている。

また近年では、子供会を中心とした神輿の行列が行われるようになり「なすとつかえ」にちなんだ「茄子神輿」が担がれる。

ここでは、子供神輿、盆踊り、神事について記してみたい。現在、祭礼は八月末の土、日曜日にかけて行われるようになり、昭和六十二年は八月二十二、二十三日にかけて行われた。

祭りの運営は上諏訪自治会が行うが、今では総世帯数六百五十戸の大所帯となってしまった。祭りの中心となるのは自治会の役員約三十名である。

神事は二十二日(昭和六十二年の場合)の午後一時から青田義雄神職の祝詞奉上が行われ、そのあと諸氏の玉串奉奠が行われ、直会^{なおひ}として役員一人一人が御神酒を茶碗に少しづつ、皆で

いただき終了する。この間三十分位であった。神職は本殿とお飯屋とを行ったり来たりしながら神事を進めるが、参列者はお飯屋の前に立ちながらの神事である。

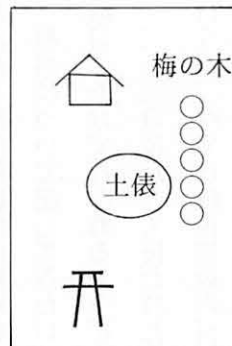
神事が終わると次の催しは午後七時から始まる民謡踊り（盆踊り）である。なすとつかえでは民謡踊りは二十年前から行われている。境内に組まれたやぐらの廻りを浴衣を着た地区内の婦人や子供が踊るのである。これに先だって十八、十九、二十日の三日間にわたって、その練習が上諏訪のコミュニティセンターで行われた。また、祭りの前日には諸準備がなされ、やぐらの組立てや、花づくりなどをする。民謡踊りは午後十時頃までで終了し、踊り手の人数は子供も含めて二百人位であろうといわれる。二十三日の催しは上諏訪地区の小学生によって行われる神輿の渡行がある。これに参加するのは地区内の小学生約二百五十名で、かわるがわるに三台の神輿をかついで（その一台は厄除茄子神輿）午後一時半頃から約二時間半かけて地区内の三キロメートルの道のりをまわる。途中四ヶ所程の休憩所が決められている。これを引率するのは、自治会の役員と子供会の役員で都合三十、四十名の父兄がついてまわる。この子供神輿の渡行は昭和五十六年頃から始まったものである。

以上の通り、近年では「なすとつかえ」にくる人は最盛期に

くらべ減ってはいるが、まだまだ近隣の農家の人も来るといふ。茄子も八百屋から仕入れて、それを売るように変わってきたが、民謡踊りや子供神輿のような新しい行事が祭礼の中に組み込まれて、祭りの構成要素となりつつある現状といえよう。

註

一、草相撲の行われていた頃の諏訪神社の様子は、下の図のようで、土俵は境内の真中につくられた。



二、昭和二十二年頃の「なすとつかえ」の様子を山崎昭氏が撮影した写真が下諏訪の内田綿店に保存されている。

三、玉串奉奠された諸氏は、

遠藤一夫、宮岡昭三、寺井清司、島崎昭二、岡野弘一、岡野真平、大谷繁、石川周二、宮木正平、岸弥吉、宮木謙二、大野稔、比留間常吉、古川忠、大橋勝治である。

四、昭和六十二年の場合は、①中央公園、②コミュニティセンター、③ニックスの前、④コミュニティセンターであった。

話者

遠藤精一、明治四十三年生、他数名

平成2年3月30日 印刷

平成2年3月31日 発行

狭山市文化財調査報告書 18

柏原獅子舞・柏原祇園囃子

信立寺おめいこう・諏訪神社なすとりかえ

発行 埼玉県狭山市教育委員会
埼玉県狭山市入間川1-23-5
電話 0429(53)1111

印刷 西川印刷株式会社
埼玉県狭山市入間川2-14-1
電話 0429(54)6666

